

<報告>大学における教授法と教育システムの開発 (8) : インターネットを初修外国語の学習に活用する

著者	森 彰
著者別名	Mori Akira
雑誌名	経営論集
巻	49
ページ	271-288
発行年	1999-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00005603/

(報 告)

大学における教授法と教育システムの開発(8)

——インターネットを初修外国語の学習に活用する——

森 彰

はじめに

- 1 外国ホームページの利用
- 2 初修外国語の体得と利用
- 3 イタリア語の自学：ケース・スタディー
- 4 初修外国語でのホームページ利用の実験

おわりに

資料 セントラル・クイーンズランド大学 調査報告書

VII インターネットを初修外国語の学習に活用する

はじめに

論者は、95年度は交換研究員として、ヨーロッパに1年間滞在した。そこでは、マルチ・リンガルなコミュニケーションが普通となっている社会を見ることが出来た。そうした経験を踏まえて、帰国後の96年度に担当した外国商学書講読(英I)において、ハイテクを活用するという新しい実験を試みた。さらに、97年度には、マーケティング・リサーチ論でのタームペーパー(以下論文と言う)の質を向上させるために、外国語のホームページを利用する実験をした。

97年、98年の2年間にわたり、東洋大学国際交流センターの副所長を勤め、海外英語セミナーや交換留学生の派遣および受け入れ等の実態を目の当たりにした。現実の国際交流活動というフィルターを通してではあるが、東洋大学における語学教育が抱えている多くの問題点を知る事となった。さらに同センターの所長である浦田教授より、英語教育に関する多くのアドバイスを得た¹。

これら2つの実験、および役職経験を踏まえ、効率的かつ効果的な、外国語を修得し活用するための新しい教授法を生み出した。本論では、初修外国語を修得しそれを活用するための新しい教授法に論点を絞って論述したい。この教授法の内容は極めて簡単である。

- ・ 学生が関心を持っている領域の知識を、まずは日本語で仕入れさせる。学生は自分が関心を持っている事柄に関して勉学することが単位の取得に関係するとなると、驚くほど深く研究する。かくして、語学以前に必要な、高度なコンテンツを学生は身に付けることになる。
- ・ 同時並行的に、初修外国語の基礎を数時間(おおむね10時間以内)で教授する。後述するよう

に、細かい文法を教え込むよりも、基礎だけを教えて、あとは時間を掛けた自学に任す方が効果があがる。

- ・ つぎに、インターネットを使って、学生が関心を持っている領域のデータを、学習する外国語のホームページから探させる。キーワードで検索した多数のホームページのうち、適切なホームページを探し出すだけでも、外国語の修得に大いに役立つ。多分、そのために辞書を100回以上引くことになる。
- ・ 探し出したデータを教材として、毎週、2頁以上を日本語もしくは英語に翻訳させ、提出させる。ここで教員は添削してはいけない。質問に答えるだけである。年25週で50頁もの量が翻訳される。
- ・ 翻訳の困難な箇所は翻訳ソフトを使わせる。インターネットのブラウザーにも無料の翻訳ソフトはあるし、大学ならより高度な翻訳ソフトを揃えることも出来るだろう。翻訳できないで、勉学の意欲を失なわせるよりは、支援システムを使ってでも、目標を完遂させた方が良い。
- ・ 年度の終わりには、学生が自分自身で自分の翻訳を修正する。この時、年度の最初に翻訳したものはほとんど翻訳し直しになる。ということは、学生の学力は初心者を指導できる位になったことを意味する。
- ・ 原文と日本語の対訳文書をハードカバー製本して1つの作品を作る。

1 外国ホームページの利用

初修外国語の新しい教授法の開発に先立ち、96年度の外国商学書講読(英I)で得られた英語教育の新しい教授法を説明する²。本学の経営学部でも1年次と2年次とで週2回以上の語学および、語学関連の授業があった。1、2年次に語学科目を履修したにも関わらず、1年生よりも3年生の方が英語の学力が低い場合が多い³。こうした実態を何とか改善すべく、経営学部らしい教育方法を開発するために、英語の学習に関して新しい実験を試みた。

受講生が関心を持っているテーマに関する日本語の資料を何らかの方法⁴で入手させ、講義時間以外の時間帯で勉強させる。関心領域として、学生の趣味を選択させたときには、これまでに得ていた知識に加え新しい知識が入手できる。学生はさらに趣味⁵に関する勉強を自発的にすすめ、それまでの断片的な知識を体系化するようになる。関心領域に関する体系的な知識が日本語を使って得られた段階で、インターネットを使って、英語情報を探させる。主な情報源は英語のホームページである。新たに得られた英語の情報のうち内容的に重要な部分を日本語に翻訳させ、英語と日本語の対訳本を年度の後半に作成させた⁶。原則として、毎週2頁程度ずつ翻訳を提出させた。はじめのうちは、1週間に2頁の翻訳はできなかったようだが、提出の回数を重ねるに連れて、2頁の翻訳作業は困難ではなくなってきた。この間、論者(担当教員)は質問には答えるが、添削指導はしな

かった。提出された翻訳文書の良いところを紹介し、教室にいる学生に回覧し、お互いにより点を取り入れるように指導しただけである。10週間程度の期間に、平均的には、2頁×10週=20頁以上の翻訳が出来上がった。完成された翻訳は、厚さが5ミリから10ミリ近い成果物となり、大学の製本機を借用して製本させた。

要するに、学生が関心を抱いているテーマで、語学およびコンテンツ⁷に関する基礎的な勉学の指導をし、ついで、勉学成果が形になるようにすれば、学生は自発的に学習することが確認できた。外国語の授業、とりわけ英語の授業で、こうした方式を採用しているケースを聞いたことがない⁸。

2 初修外国語の体得と利用

(1) 大学における初修外国語の教育

これからの日本人は、研究対象としたり、交流を持とうとした国の言語を使うことの重要性を認識する必要があるだろう。世界には多数の言語があり、複数の外国語の基礎⁹を大学時代に修得することが望ましい¹⁰。しかしながら、本学の経営学部にあっても、初修外国語に関しては、外国語自体の勉強を目的とする教育が一般的であり、初修外国語を使って経営学や外国の実態を学ばせる教育は、皆無に近いといえる。さらに、第2外国語として1つの外国語の履修を義務づけている¹¹。

これまでに、初修外国語を学生時代に活用する機会が少なかった原因はいくつかある。そのうち、最大の原因と思われる3つを示す。

第1の原因としては、初修外国語を教育する担当者が経営もしくは経営学の専門家ではなく、主として、語学もしくは文学の専門家であったことが挙げられる。こうした専門家が初修外国語を担当すれば、初修外国語教育の目的が初修外国語の使用ではなく、初修外国語自体の学習になることは自明の理であろう。

第2の原因としては、文法などのテキストや入門書は充実しているが、リーディング教材は、文学もの、時事もの、会話もの、など限られた領域で種類も少なかった。経営や経営学に関する教材は皆無であったかもしれない。こうした環境の中にあっては、初修外国語の授業は、初修外国語の知識を教授するだけに留まってしまい、初修外国語を勉学や生活で活用するための教育¹²にはならなかった。

第3の原因は、初修外国語を担当している語学の教員の多くはパソコンを所有せず、インターネットも使っていないことが多かった。その結果、カセットテープとビデオ以外の情報システムを使った教授法には不案内で、大学の教室の中での教育を中心にした教授法が採用されている。

状況は一変した。まず、第1の原因に関しては、語学教員の学部への分属が進みつつあることが挙げられる。その結果、語学教員の人事、カリキュラム編成の責任が学部任されるようになって

きた。第2の原因に関しては、初修外国語の教材は、無限に入手できるようになった。インターネットを活用すると、自分の勉学や研究に役立つ外国語の資料はいくらでも簡単に入手できる¹³ようになった。そうした資料を初修外国語の教材として活用することも出来る。第3の原因に関しては、オフキャンパス教育のインフラが急速に進んでいることが挙げられる。教室で初修外国語の基礎の基礎を数時間学べば、マルチメディア教材を活用した自学も可能となった。外国語で作成されているホームページの検索の仕方なり見方や読み方を身に付けければ、外国語のホームページであっても楽しみながら読めるようになることも判明した。ホームページが読めるようになれば、外国語で書かれた比較的簡単な経営学の資料も読めるだろう。教育を支援することが出来る情報システムの発展の成果を語学教育に導入し、高度な教育サービスの提供の実現は教員の責務であると考えられる。

(2) 初修外国語を研究に活用する学生

97年度からは、3年生と4年生向けの科目であるマーケティング・リサーチ論を、論者は担当した。インターネットのホームページなどを使ったケース・スタディー、事例収集、最新実態の検索、アイディアのネタ探し、各種調査データの収集、などの技法を中心テーマとしたマーケティング・リサーチ論を講義した¹⁴。論文を作成するにあたっては、海外の事例を使用することを義務づけた。具体的には、外国語のホームページを検索して、重要な部分は翻訳させ論文の中で資料として利用させた。

教員が予想したレベルより高いレベルの勉学をしたケースが発生した。それは、論文作成にドイツ語の資料を利用した学生が発生したのである。この4年生の学生は、前年度に「外国経営学書講読」を履修した。その講義では、ドイツ語の知識が全く無いまま、6回ほどドイツ語の初歩を講義された後に、ドイツ語の経営学書を読まされた¹⁵。卒論のテーマは「電子マネー」であり、その1つのケースとしてドイツにおける電子マネーの実験の実態¹⁶をインターネットで調べ、ドイツ語のホームページ資料を日本語に翻訳していた。

(3) 外国語自学の可能性の検討

イタリア語のホームページ¹⁷を検索した学生もいた。この学生は、イタリア語は全くできない。イタリア語ができなく、人の手助けもなく、イタリアのホームページを探し出せた。作業自体の程度は低いが、初めての試みという意味では高く評価できる。学生にとっての次の目標は、自力で翻訳することだろう。それができれば、その学生は語学全般に恐れを抱かなくなるだろう。学生にその一部を翻訳するよう指導した。残念ではあるが、その学生はそれ以後の講義にはまったく出席しな

くなった。学生に無理な勉学を指導したのかと不安になり、論者自身で、イタリア語が自学できるかどうか実験した。それはできた。その詳細は次項に示す。

さらに、新しい発見をした。初修外国語のテキストとしては、インターネットのホームページが適切であることが判明した。英語以外の言語で作成されているホームページの多くは英語版を用意している¹⁸。上記のイタリア語のホームページにも英語版はあった。ただし、後述するように、正確な英語ではなかった。外国のホームページでは、学生一人一人の関心に合った、手作りの、初修外国語と英語の対訳の、テキストが提供されていると考えることが出来る。初修外国語のわからない部分は、英語版の対応する部分を読めば内容が理解できるだろう。ここでは、英語を実際に活用する場合も発生する。言い換えるなら、日本語で初修外国語を学ぶのではなく、英語を使って初修外国語を学ぶ新しい方式が確立できるだろう。

マルチリンガル能力¹⁹の修得はこれからの日本人に不可欠な要件であると考えられる。外国語は教わって身につくものではない。自学自習が重要な要件となっている。そうした意味で、一人で外国語を学ぶためのノウハウの開発も必要となるだろう。ノウハウ開発のための第一歩が、次のケース・スタディーである。

3 イタリア語の自学：ケース・スタディー

学生が探し出して来たイタリア語の資料を、イタリア語を全く知らない論者が、果たして理解できるかどうかの実験をした。ここで使用した資料は、“Botta & B”というイタリアのファッションメーカーのホームページであった。このホームページの最初の部分は次に示す通りである。

Da una esperienza di tre generazioni come tessutai prima e confezionisti poi, nasce “Botta & B”, negozio cuneese che propone abbigliamento di alta qualita con le vetrine che si affacciano alle porte del centro storico, di fronte alla grande Piazza Galimberti, sotto i portici di corso Nizza.

イタリア語を自学するために、つぎの2冊の本を購入した。

浦 一章『イタリア語早わかり』三修社、1997年。

『伊和中辞典』小学館。

最初に、1時間程かけて『イタリア語早わかり』の重要そうなところを拾い読みした。ついで、上記したイタリア語の文章の単語をすべて辞書で引いて、翻訳してみた。40分程度で大体の概要は理解できた。

イタリア語を、対応すると思われる英語もしくは日本語もしくはフランス語とに置き換えた。括弧内は日本語もしくはフランス語の対応する単語である。単語を置き換えただけであるので、翻訳されてはいないが、この商店の歴史と立地場所を説明していることは理解できる。

From(De) one(une) experience of(de) three(trois) generations as(comme) tissue at first(premier) and(et)

仕立て after, 生まれる (nâit) "Botta and B", 商店 クーネオの which(que) proposes 服 of high(haut) quality(qualité) with the(le) ショーウィンドー which(que) itself 見せる at the(à le) 門(porte) of the centre 歴史的な, in front of the grand (広い) 広場 ガリンベルチ, under(sous) the 入り口 of 大通り ニッツア (ニース).

イタリア語は自学で1時間学んだだけで、さらに会社の概要やイタリアの地理も知らない論者が直訳すると次のようになった。

最初は服地屋、次は仕立て屋として、3世代の経験から、Botta and Bはクーネオに生まれた。この店はショーウィンドーに高品質な服を飾っている。この店はニース大通りの入り口にある大きなガリンベルチ広場に面した歴史的な中心地への入り口にある。

辞書引きで苦労した内容は、次のものである。クーネオ、ガリンベルチ、ニッツア、などが固有名詞であることがわからなかった。学生が提出したイタリア語のプリントでは、イタリア語特有の文字（たとえば、à）が？マークとなっていたので、疑問文であると勘違いしてしまった。ブラウザーの表示文字を欧米にしておかないと、アクサンとかウムラウトといった記号が使えないからであった。

イタリア語を理解するにあたって、役立ったのは次の事柄である。イタリア語の単語をすべて英語に置き換えれば、全体像は理解可能である。イタリア語と同じラテン語族に含まれているフランス語の基礎的な知識を持つと楽である。単語、形容詞のかかり方、代名動詞、名詞の性、など、フランス語と多くの類似性がある。このような点は、語学の専門家にとっては常識の様であるだろう。にもかかわらず、こうした常識が語学の教育に生かされているのだろうか²⁰。

英語版でのホームページは次のようになっている。この英語は、かなり不正確で、多分、英語が不得意なイタリア人が書いたものと考えられる。もしくは、翻訳ソフトで機械的に翻訳したものに全く手を入れていないのかもしれない。この程度の英語でも、堂々とホームページに掲載している。

Botta & B became, from an experience of three generations first of all in quality of cloth mill and than as tailor's. Our Company established in 1900, have his seat in the historical center of Cuneo, a city in the north-west side Italy. The show room is in the front of the Piazza Galimberti square all arcade long of the Nizza street.

近頃の検索エンジンには翻訳機能が付属するようになった。この翻訳ソフトを初修外国語の勉強に取り入れることも必要だと論者は信じている²¹。よく知られている AltaVista²²がその一つである。同ソフトには、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、スペイン語、フランス語のグループと英語との双方向の翻訳機能がある。

英語 ←→ ドイツ語
 イタリア語
 ポルトガル語
 スペイン語
 フランス語

文字列を翻訳するだけでなく、HTMLのまま翻訳し、画面のイメージを崩さずに、結果を表示してくれる。この機能を使ってイタリア語から英語に翻訳した結果が次の英文である。

From a experience of three generations like tessutai before and confezionisti then, it is Botta & B", cuneese store that proposes apparel with the display windows that show oneself to the doors of the historical center, of forehead to great Piazza Galimberti, under the porches of Nizza course.

正しい英語には翻訳されていないが、細かい表現の誤りを無視すれば、論者が先に示した、単語を置き換えただけの資料よりは良い。現在の AltaVista に付属している翻訳ソフトの機能は、十分とは言えない。たとえば、文章が長くなると、翻訳が正確にできなくなる。辞書の単語の数が少ないらしく、tessutai や confezionisti のように、イタリア語のままになっている単語も多い。前後の単語の内容で訳語を選んでいないようで grande を great と訳す。shows oneself のように、代名動詞が文法的に直訳されている。専門的に評価すると、その他にも多くの問題点があるだろう。しかし、初修外国語学習の諸段階で、自分ではほとんど翻訳できない学生にとっては、翻訳ソフトは「溺れた時の藁」以上に役に立つだろう。現時点の翻訳ソフトの機能が足りないとしても、今のようなス

ピードで翻訳ソフトの機能が充実していけば、数年のうちに無料ソフトでも、十分安心して使えるようなソフトが出回る可能性が非常に高いと思われる。

4 初修外国語でのホームページ利用の実験

98年度には、経営学部の1年生向けのフランス語のクラスで、フランス語の教員が実験した。年度の後半に、学生毎にホームページからフランス語の資料を探し出し、毎週1パラグラフずつ翻訳させ²³、対訳のレポートを提出させた。

中間結果を見させてもらった。30弱のレポートのうち、非常に優れているレポートが2割程度あった。この2割というのは、一般的に本学部でよく勉強する学生の割合に合致する。ほとんどのレポートはワープロで作成されていた。したがって、インターネットからのデータをファイルにダウンロードして、ワープロで加工することは当たり前になっているようである。

さらに、対訳の文書形式では、学生が考えたのであろう、論者の開発した方式と異なった方式を採用している学生がかなりいた。論者は、段組方式もしくは上下分割法式を採用していた。しかし、この方式は実際に使ってみると、ワープロの操作の方式となじまない面が多い。学生は、1行のフランス語文章の下に、翻訳した日本語の文章を書き込んでおり、ワープロを使いこなすワープロ文化が完全に普及していると感じた。

問題点もあった。第1の問題点は、学生の計画書で、毎週異なった領域のフランス語の翻訳を計画している学生が多く見うけられたことである²⁴。第2の問題点は、担当する教員が、添削に時間がかかりすぎて大変だ、と悲鳴を上げていたことである。学生の自発的な継続的なさらに長時間の学習だけが実力を向上させるのであって、教員の丁寧な指導は副次的であると言う考え方を採用すれば問題とはならないだろう。

こうした問題が発生するのは、イマージョン教育²⁵の基本的な考え方が理解されていないからである。イマージョン教育は、カナダのケベック州でのフランス語教育から発生し、オーストラリアでの英語教育で大幅に採用されている方式である。論者は、学部の外国語教育の方式と大量留学への道作りのために、98年の11月にオーストラリアのセントラル・クイーンズランド大学で調査した。この結果は報告書としてまとめられているが、その一部を参考資料として文末に掲載する。

おわりに

学生が興味を持っている対象は、英語圏だけではない。ドイツやイタリアといった英語圏以外のホームページを検索した学生は、初修外国語を活用せざるをえない。学生のこうした勉学を観察していた結果、初修外国語のテキストとしてインターネットの外国語ホームページが適切であると判

断した。外国語ホームページの活用により、日本語で初修外国語を学ぶのではなく、英語を使って初修外国語を学ぶ画期的な方式が確立できるだろう。

以上の結果は97年度の実践が主たる素材となって得られた。次年度以降に教育面での研究・開発すべき事柄としては次のものが考えられる。

- ・ 大人数に対しても有効となる初修外国語の具体的な教育方法の開発
- ・ 学部教育としての初修外国語のありかたと教育方法の開発
- ・ 1ヶ月で使えるようになる初修外国語のインテンシブ教育システムの開発
- ・ 語学教育の専門家である教員や教育システムを運用している職員との共同研究の実現
- ・ その他

資料 セントラル・クイーンズランド大学 調査報告書

1998年11月12日より同22日までオーストラリアのセントラル・クイーンズランド大学（以下CQUと略記する）を訪問した。訪問の目的は3つあり、第1は、学部学生の短期および長期の大量留学の可能性の調査である。第2は、私の研究領域である流通システムの研究であり、第3は、春に実施される「語学セミナー」の受入環境の視察である。ここでは第1の目的に絞って調査の結果を報告する。

Dooley 先生

Senior lecturer²⁶ in Operations Research

School of management

先生はOR、品質管理、およびロジスティックスを担当している教員である。この先生とは、主として流通領域の情報交換をしたが、経営学部学生の専門科目受講の可能性に関しても討論した。その結果、次に示す実態と意見を知る事ができた。

- ① アジアからの留学生の多くは、readingは出来てもhearingの能力は極端に欠けていることが多い。したがって、日本からの留学生も同じで、もし計画的に学生を送り込むのであれば、通訳サービスを用意することが不可欠となるだろう。そのサービスはCQUで用意することも可能である。または東洋大学で用意してもよいだろう。
- ② この問題は基本的であり、留学生の英語能力の低さに講義をあわせることはできない。日常生活で得られる英語能力は学問に必要な英語能力とは異なるので、英語スクールに在学して、学問に必要な英語のスキルを身に付けることも考えられる。
- ③ 経営とかマーケティングの領域は、教材の準備の容易性、学生の日常生活での体験、楽しめる、

といった面で、比較的容易に教育の方法を作り出すことが出来る。

- ④ 最も効果的なスタイルは、日豪の学生のグループを作り教育する方式である。たとえば、前半は日本で勉学し、後半はオーストラリアで勉学するといった方式である。なお、CQUの経営学部での日本語の受講生は数人であるが、イマージョン教育センターには80名ほどがいる。
- ⑤ 私(森)から、バディシステム(日豪の学生が1名ずつチームを組むシステム)をつくり、インターネットで共同研究する方式を提案したが、反応はなかった。
- ⑥ 英語の学力を付けるにはコミットメントが重要であり、学生が魅力を感じる物とのコンビネーションが不可欠である。このコンビネーションは、場所、レクレーション、その他多くのものが考えられる。
- ⑦ 日本の学生を受け入れるためには、日本語教育部門の協力も必要かも知れない。いずれにしても、TOEFLの一定の成績は不可欠となる。
- ⑧ 教育期間は3ヶ月程度が必要となる。2週間とか3週間程度のカリキュラムも考えることは出来るが、協同研究的なものは難しいだろう。
- ⑨ なお、専門科目のロジスティックスのコースガイドは(Unit Profile)は24頁に渡る資料である。その見本は私(森)が持っていますので、興味がある方はお問い合わせください。

Tony Erben先生

Director and Senior Lecturer

Center for Studies in Immersion Teacher Education

Faculty of Education

Doug Wyer氏

Head of School

Professional & Workplace Education

Faculty of Education & Creative Arts

イマージョン教育の専門家である両氏の話を聞いた。

- ① 最初は聞く力を付けるところから始める。
- ② 汎用的な英語力ではなく、特定の領域の仕事(professional area)に従事しながら英語を学ぶ方式が有効である。たとえば、3ヶ月もしくは6ヶ月、もしくは1年間をKマート等の職場で働きながら英語を学ぶ。この間、教員が適切に指導する体制となっている。たとえば、週のうちの1日は大学で学び4日は職場で働く形が典型的である。このためには、working occupational training visaが活用できる。Vocational(職業場の)Education Trainingなので、給料は得られない。

- ③ ロックハンプトンだけでなく、CQUの分校がある地方のキャンパスでもこの種の教育はなされている。ラム酒の生産工場、石油基地、商業施設、牛の牧場など、オーストラリアの社会を理解するのに役立つ研修場所も用意されている。
- ④ 英語学力が低い学生のためのイマージョン教育も用意されている。それは、インターンシップ、教室での授業、インテンシブ教育、レギュラー教育、などを適切に組み合わせる方式である。小売の場合は、最初の1ヶ月はバックヤードでの作業となるが、順次、売り場、レジ、……と職場をかえて、最終的にはアシスタント・マネジャーの下で働くrepeat programが提供されている。
- ⑤ 職場では、ローカル・マネジャーが責任持って対処してくれる。しかし、トレーニングフィーは要求されていない。場合によっては、アルバイト代を払ってくれることもある。大学としては、最初に学生の要望を聞き、それから、会社に交渉している。

David Chapman先生

Lecturer in Japanese

Center for Studies in Immersion Teacher Education

Faculty of Education

大変に日本語のうまい先生であった。食事をしながらの話し合ったため、メモを取れなかった。後から思い出しながらメモを作ったので、資料としては十分ではない。

- ① Study Skillを重視した教育をしている。具体的には、考える方法、PCの使い方、図書館の利用方法、レポートの作り方²⁷、プレゼンテーションの仕方、などである。
- ② 費用は学生が負担することが原則である。
- ③ とくにおもしろい企画はEnglish in the Outbackである。Carnarvon George (カーナーボンゴージュ) 国立公園でキャンプをし、アウトドア・レクレーションを楽しみながら英語を勉学するという内容になっている。観光客が行かない、日本人が居ない、ところでのサバイバル英語のトレーニングとなる。オーストラリア人とのバディーを組むシステムとなっているので、1対1の英語学習が出来る。アボリジニの生活をも体験でき、場合によっては、虫を食べることもある。

Toshio Ikeda先生

Lecture

Center for studies in Immersion Teacher Education

Faculty of Education

イマージョン教育の説明ビデオを見ながら、イマージョン教育の概要を説明してもらった。

① イマージョン教育に関する資料など

静岡県沼津市の加藤学園では小学校からのイマージョン英語を実施している。両親向けのパンフレットやシンポジュームの資料が提供されている。また、明海大学の佐々木文彦先生（日本語学科）は本学（CQU）のイマージョン教育に詳しい。

② イマージョン教育の効果に関して

- ・ 当初の成果は少ないが、時間がたつに連れて高い点を取るようになる。
- ・ イマージョン教育の原形は仏語の教育方法としてカナダのケベック州で開発されたが、英語と仏語とが半々で教育するよりも仏語だけで教育する方が効果があった。
- ・ しかしながら、大学でイマージョン教育を実施するときには、すべてを英語とするのでは、効果は高くないだろう。講義は日本語で行なうが、テキストは英語とする。そして、チュートリアルとかゼミは英語だけにするのが好ましいだろう。
- ・ 多民族国家であるオーストラリアでは、第2言語（日本での外国語にあたる）は日、独、英、伊、スペイン、ラテン、など9つの言語が提供されている。しかしながら、日本では大学受験の制約があるために実現は不可能だろう。

オーストラリアの広大な土地

ロックハンプトンからタウンズヴィルまで、約800キロをレンタカーで移動すると話したところ、幾つかのアドバイスを受けた。「オーストラリアは国土が日本の20倍で、人口は1800万人くらいしか居ない」状況でのサバイバル・ライフスタイルを教えられた。

- 1) ガソリンはフルタンクにして出かけること。
- 2) 飲み水と食料を十分に積んで行くこと。高速道路沿いは、レストランもホテルも無い、無人地帯で、夜になるとガソリンスタンドも300キロの間に2軒になってしまう（昼でも9軒しかなかった）。300キロを一気に突っ走るのがオーストラリア流らしい。
- 3) レンタカーは携帯電話付きでないと危険。故障したときの連絡ができないと、生死につながる。
- 4) 夕方から夜にかけてはカンガルーが活躍する時間帯で、高速道路を横切るので、ぶつからないように気を付けること。ぶつかったときには、運転者の方の命があぶない。実際に走ってみると、ワラビの死体が300キロの間に4つもあった。

オーストラリアでは、高速道路といっても、高架ではなく、両側にフェンスもなく、日本での地方の県道（片側1車線、両側2車線で、1メートルくらいの路肩が付いたアスファルト舗装の道路）程度である。制限速度は100キロ/時で、ところによっては110キロ/時もある。カメラとヘリコプターを使っただけの取り締まりのため、ほとんどの車は5キロオーバー以下で走り、一部の車は10キロ

オーバーで走っている。それ以上のスピードで走る車はほとんど無い。この高速道路は町の真ん中を突っ切っており、生活道路となっている。この区間は、60キロ／時となっている。

日本やイギリスと同じように、車は左側通行となっている。したがって、日本で運転を十分していれば、違和感無しに運転は出来る。

Bartlett 先生

Assistant vice chancellor

Foundation Professor of Education

学長で副総長補佐²⁸の先生である。CQU全体の戦略をお聞きした。さらに、東洋大学国際交流センターの現状を報告した。

- ① 移転計画。経営、情報、芸術、などの一部の学部を市内の中心部に移転することになった。産学協同でビジネスの活性化をねらっている。
- ② 教育学部は長期的な関係の樹立を得意としている。1つの領域から提携をはじめ、順次提携の範囲を広げている。現在は、宮城教育大学、HangYang Uni. (Seoul)、中国の大学などと、MOU (Memorandum of Understanding) を交わしている。
- ③ とりわけ、Distant Educationのエキスパートも揃っており、東洋大学でも導入することは可能である。(しかし、今回の調査で、その教育の内容を見ることはできなかった。)

バーバラ先生

日本語のイマージョン教育を担当している。

- ① 高等学校までの日本語教育では、学校内に小さな日本の社会を作りだし、すべての活動では日本語を使うようにしている。日本語を勉強するのではなく、日本語で勉強することを目的としている。こうした事が出来るのは、大学²⁹の入試の可否は、高等学校の成績で決まるからである。
- ② 日本語を専攻している大学3年生の研究報告を聞く。研究タイトルは「日本の多様性に関して一方言の側面から」であった。研究の内容や構成に若干の問題点はあるが、複数冊の参考書(日本語の文献)を利用し、すべて日本語で記述し口頭報告している。質問に対しても日本語で適切に答えられていた。

Pullyn 氏

Director CQU International

外国人への英語教育を担当している組織の責任者である。

- ① 小人数から中人数用の教室をいくつか持っている。勉学には非常に良い雰囲気であった。
- ② オフキャンパス教育を重視している。教室の中での教育には限界が多く、実際の社会生活の中で英語が学べるようにしている。
- ③ もっとも代表的なコースは、preparatory コースで、5 週間コースである。オーストラリアで主流となっている英語検定試験 I E L T S (speaking と writing が含まれる) で評価する。大学で必要とするスコアは6.0以上と言われている。T O E F L に換算すると550程度である。この成績を基準にして学生の英語力を引き上げている。
- ④ これよりもレベルの低いコースも用意されている。
- ⑤ Carnarvon Geoge コースもおもしろい。観光業者が手配するが、教員が引率する。学生の英語力に応じてコースを設定する。2～6 週間を考えている。アウトバックでは、インフォーマルな指導に加えて、教員抜きのサバイバル生活を経験させる。費用は通常の英語教育コースよりは30%位は高くなるが、多くの経験を積み、学力増進が図られる。
- ⑥ この6月にC Q Uを卒業した日本人の水上さんも昼食に招かれていた。きれいな英語を話し、大人の中に入っても、対等に話すところにびっくりした。これが、「大人になって帰ってくる」と言うことだな、と、感心した。
- ⑦ この4月に九州女学院 (高校)³⁰を卒業し、C Q Uの語学スクールに入校し、この9月から大学に入学したYoshi OGATAさんの話を聞いた。語学学校の特色を次のように捉えていた。
 - ・ 長いエッセイとカリサーチレポートを書かされる。1500wordsから3000wordsのボリュームである。
 - ・ ユニットプロフィールにも記載されている締め切り日が厳格に守られている。提出前は、毎日3時間程度は勉強させられる。
 - ・ 教員は非常にフレンドリーである。
 - ・ 放課後はアルバイトをしている人が多い。オーストラリアでは高校を卒業すると大人とみなされ、授業料を自分で稼ぐものも多い。オーストラリア人は、アルバイトと勉学のけじめを付けるのは得意なようだ。
 - ・ 現在はMrs. Linda Fitzgerald先生のレクチャーとチュートリアル (おのおの週1回) を履修しているが、2科目の履修だけでも大変。
- ⑧ 英語の先生以外が英語を使うこと

Pullyn氏と話し合っていたところに、Yoshiが入ってきた。お互いに日本人であるとは知らないで、英語で話していたが、途中で、お互いに相手が日本人であることが分かった。「先生は何を教えられるのですか?」。「マーケティング」。「えー!、英語の先生でないのに英語を使えるのです

か！！！！」。この会話でも分かるとおり、日本では英語を使うのは普通ではないとみなされているようだ。そうした意味で、高校までの英語を根本的に直す必要があるかもしれない。そのために、大学入試のための「受験英語」を追放して「実用英語」にきりかえることが望ましい。

その後の英語での打ち合わせの中で「エガリテ」という単語が出てきた。その席にいた発言者以外の全員はハテナ？という顔つきをした。私は前後の関係から、平等を意味するフランス語の *egalité* と理解して、「それは *equality* のフランス語ですね」と言った。ここでも Yoshi は「えー！！、なんでフランス語の先生でない先生がフランス語が出来るのですか！！！！」こうした驚きの背景には、「外国語は特別なもので、高度な教育を受け、多大の努力をしないと身につかないものである」という考え方が存在しているようである。語学を特別視し、特権とする考え方がある限り、語学教育の改革は進まないかもしれない。

注

- 1 浦田誠親「改革期における大学の英語教育を考える——目的設定とプログラム多様化のために」『東洋』第34巻第9号、東洋大学通信教育部、1997年。
浦田誠親「英語はすべて選択科目とする提案——意義ある教育のため高い目標設定を——」『東洋』第35巻第12号、東洋大学通信教育部、1998年。
- 2 森彰「大学における教授法と教育システムの開発(6)——大学入学時の英語の学力で経営学を学ぶための技能——」『経営論集』第45号、1997年。
- 3 同資料。英語教育を取り巻く多くの問題点を検討した。実際に講義を進めている間での学生からの情報によると、次の状況も明らかになった。
多くの英語科目では受講生の全員が彼らの関心とは関係の無いテキストを使っている。さらに、事前に翻訳を割り当てられている。しかも、章節や項もしくは頁単位ではなく段落単位のようなものである。受講生は数ヶ月に1回だけ、1週間の間に英語のテキストの「数行」を翻訳して授業で発表する、といった状況が発生するようだ。
- 4 ここで、大学図書館の検索システムや図書館に用意してある文献検索用のCD-ROMを使わせた。使い方の指導は図書館にお願いした。また、都心にある代表的な大型書店（たとえば、八重洲ブックセンター、紀伊国屋、など）を紹介した。こうした指導は、学生に図書館のシステムを使わせたり、都心の大型書店に足を運ばせるためには不可欠なようである。
- 5 経営学部の場合には、最初は学生の関心が高い趣味から始めて、ついで、その趣味を取り巻く社会環境、産業の実態、それをサービスしている企業の実態、と行った順で、徐々に経営の領域に導いていくことが肝要である。
- 6 成果物の対訳本は論者の研究室に大切に保管されている。
- 7 経営学部の学生に対する語学教育でコンテンツを重視する、といったときのコンテンツとは一体なんだろうか。ある英語教育の専門家に、これからの英語教育の決め手は何か聞いたところ、「コンテンツベースド」であると言われた。では、そのコンテンツとは何かと聞くと、「経営学部向けには、環境問題を扱った

テキストを使っている」という。しかし、良く考えると、環境問題に関心を持っている学生少ないだろう。また、環境問題をとり上げることが経営学部の学生にとって有益であるとはいえないだろう。さらに、英語のテキストだけで環境問題に関する英文を読んで、環境問題を理解することは出来るだろうか。日本語の本でも10冊以上読破しなければ、コンテンツは身につかないというのに。そして、環境問題の専門家でない英語の教員が、はたした環境問題を講義できるのであろうか。こう考えると、「コンテンツベースド」という呪文だけが先行しているようである。

- 8 論者が調べた狭い範囲ではあるが、必修科目となっている英語で、半年間に20頁以上の資料を全訳させるクラスは見当たらなかった。この科目は必修科目でなく、自由選択科目である。したがって、英語の力を付けたいと願っている学生が履修しているとも考えられる。とはいえ、必修科目でもないのに、必修科目以上のホームワークを課しても学生が自発的に勉強したことは、これからの教授法の開発にとって有益な実験であったと言える。なお、97年度からはこの方法を踏襲して、この科目および同(英Ⅱ)は兼任講師(山内清史先生)に担当してもらった。
- 9 ここで言う「基礎」とは、4コマから8コマ程度で説明できる範囲の内容である。1年もかけて基礎を勉強させるのは、学生の勉強意欲を殺ぎかねない。
- 10 その嚆矢として、多言語を紹介する科目を設置した慶応義塾大学湘南藤沢キャンパスのケースは参考になるだろう。

関口一郎『慶応湘南藤沢キャンパス・外国語教育への挑戦』三修社、1993年。

- 11 平成8年度からの本学経営学部の新しいカリキュラムでは、商学科では、第2外国語さえ、必修から外れてしまった。現在は、平成12年度カリキュラムには第2外国語を復活させようと、一部の教員が努力している。そして、この校正の時点では、復活が決定した。
- 12 学生の関心事は多様である。フランス語を学ぶ目的を考えてみよう。多くの場合は、フランス語自体を学んだり、経営学の勉強に使うことを目的としているのではない。フランス語の勉強で苦勞をしたいのではなく、フランス語を使って楽しい生活を送りたいはずである。フランスの文化、社会、芸術、などに関心があり、できれば、フランスに旅行したいと考えているのだろう。ワールドカップ、ツール・ド・フランス、パリ・ダカール・レース、フランスワイン、コートダジュール、モナコ、ベルサイユ宮殿、オルセー・オランジャリー・ルーブル美術館、印象派、ピカソ、ルノワール、シャガール、等などに関心を持っているだろう。しかしながら、このように多様な関心事に対応した、初修外国語向けの教材はほとんど無かった。
- 13 Netscape Communicatorでは次の文字が使えるようになっている。欧米(ドイツ語やフランス語も含まれる)、中欧、日本語、中国語、簡略体中国語、韓国語、キリル文字、ギリシャ語、トルコ語、など。
- 14 森彰「大学における教授法と教育システムの開発(7)——インターネットでの情報収集を活用した論文作成の手順——」『経営論集』第47号、1998年。
- 15 この科目の担当者は専任教員であった柿崎助教授である。氏および学生(佐藤光香)の説明によれば、テキストとしては経営学書の一部分で、8頁のコピーが配布された。経営学の専門知識に関する説明もあり、1年間に読めたのは6頁程度だった。この授業を受けた学生のうち一人だけとはいえ、初修外国語を使って卒業論文を作る努力をした学生がいることは特筆に価すると思われる。
- 16 この学生が見つけ出したドイツ語のホームページのURLは、次の通りである。

<http://home.t-online.de/home/06995530471-0001/einleit.htm>

参考までに、このホームページの最初の部分のみを紹介する。

Was ist "Digitales Geld" ?

Digitales Geld sind elektronische Wertseinheiten, die in Form digitaler Daten gespeichert und übertragen werden können. Man unterscheidet das Cybercash (Netzgeld) und die prepaid Card (elektronische Geldbörse).

17 <http://www2.lrcser.it/botta/>

18 一般的にホームページの最初の頁でEnglishをクリックすると、英語版のホームページに切り替わる。東洋大学のホームページでもそうになっている。

19 ヨーロッパではマルチリンガルが当たり前となっている。しかしながら、その実態を見ると、必ずしも異なった語族をマスターしているわけではない。たとえば、フランス人の場合、母国語のフランス語に加えて、英語が出来るのは当たり前。スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、ルーマニア語、で6か国語と数えられる。しかし、英語以外はラテン語諸語である。日本人が考える程のマルチリンガル能力ではないと言えよう。評価すべき点は、彼らはそうした諸言語を実際に使っているところだろう。

多言語を活用した人は多くあるが、その代表的な人として、トロヤの遺跡を発見したシュリーマンと、日本の博物学者である南方熊楠（みなかた くまぐす）、とを挙げることが出来る。

シュリーマン著、村田数之亮訳『古代への情熱——シュリーマン自伝』岩波文庫、1954年。

桐本東太他編『南方熊楠を知る事典』講談社、1993年。

鶴見和子『南方熊楠』講談社、1998年。

松居竜五『南方熊楠一切智の夢』朝日新聞社、1997年。

南紀白浜にある南方熊楠記念館では、南方の遺稿などをマイクロフィルムに収録しつつあり、数年以内にはインターネットで、資料を公開する予定である（同記念館館長談）。

20 外国語を学ぶときに、英語→フランス語→スペイン語→ポルトガル語→イタリア語→ルーマニア語という順番で学と楽であると考えられる。

21 大阪の観光をするにあたって、東京から大阪まで歩いていく（言語を修得する）のは無意味だろう。「歩いていくとはこういくことだ」と、数十キロ歩かせる（語学の初歩を学ばせる）ことは不可欠だろう。その後は新幹線で大阪に行き（翻訳ソフトなどの支援システムを活用する）、目的である「大阪を楽しむ」ことが出来ればよいと思う。

大学教員としては恥ずかしいことかもしれないが、ここで告白する。論者はフランスに時々フランス語で手紙を出す。まず、英語で手紙を書く。ついでAltaVistaでフランス語に翻訳する。Proofing Toolsというソフトで、文章チェックする。そしてE-mailを出す。かつて、Proofing Toolsで修正した文章を私が再修正して出し、文末に添削して戻してもらいたいと追伸を付けた。戻ってきた添削結果は、赤が入っているのは論者が修正したところだけだった。ということは、フランス語の初学者である論者の語学力より、翻訳ソフトの能力の方が高かったことを意味する。

22 <http://www.altavista.digital.com/>

23 論者は2頁ずつを主張したが、フランス語の教員は、学生の力では1パラグラフが限度といって、譲らなかった。フランス語の教員は正確に翻訳することを期待しているのに対して、論者は簡単な文章を大量に翻訳することが重要と考えている、その差が翻訳の量に反映されたと考えられる。

24 たとえば、第1週はフランスのファッション、第2週はシャンゼリゼ、第3週はフランスワイン、と言っ

た具合である。こうしたテーマの選択法式を採用すると、いつまでも辞書から離れられない。次のような、テーマ選択が望ましい。ワイン→フランスワイン→ボルドー→メドック→シャトー××といったように、範囲を徐々に狭め、内容を徐々に深めていくことが望ましい。

- 25 イマージョン (immersion) 教育に関しては、海外で多くの研究と成果が見られ、日本でも導入されている。下記の資料を参照されたい。
『第2回バイリンガル教育国際シンポジウム報告』加藤学園、1997年。
『英語イマージョン Parent Handbook』加藤学園。
- 26 オーストラリアでの教員の職位は、
プロフェッサー、アソシエイトプロフェッサー、シニア講師、ジュニア講師、講師、アシスタント講師となっているようである。プロフェッサーは学部数人しか居ない。あとはすべて各種講師となっているらしい。
- 27 レファレンスの書き方、注の付け方などは、大学に入ってくる前に教わっているので、大学では教えてはいないとのことである。
- 28 オーストラリアではchancellor (総長) は名誉職で卒業式に卒業証書を手渡すだけで、副総長が日本での総長となっており、副総長補佐が日本での副総長の役割を果たしている。
- 29 オーストラリアは2つのマイナーな大学を除くと、すべて国立もしくは公立の大学である。ただし、CQ Uは公立であることは確かだが、国立なのか州立なのかは、教員自体もはっきりとしていないようである。両方の性格を持っているようである。
- 30 九州女学院は熊本県内に大正15年に私立のミッションスクールとして設立された。英語教育と音楽教育を特色とした高等学校で、県内の女子校としては高く評価されている。オーストラリアのアデレードに協定校があり、毎年2名が交換留学生としてオーストラリアに派遣されている。

(1999年1月8日受理)